

# “飛天プロジェクト”実践報告 —無重量環境における東アジア古代舞踊の試み—

お茶の水女子大学 石黒節子

## 目的

恒常的に人間が宇宙活動を行う時代に入るにあたり、芸術文化の観点から無重量環境における行動を認識することは重要である。本研究は東アジアの人々が想起した敦煌（中国）や飛鳥（日本）に残る飛天図を参考に、無重量環境における舞踊を行う。

## 内容

敦煌、飛鳥の飛天図を収集整理して、飛天の概念を把握し、音楽については敦煌琵琶譜を解明し、飛天の音楽世界の構造を分析する。舞踊と音楽両面から想定した飛天の動きを無重量環境（無重力模擬の航空機のなか）で実施した。

## 結果

### 1. 飛天の概念

飛天とは空を飛ぶ天人のことであり、仏教用語としては「空中を舞って仏の功德を讃え、仏世界をまもる天人」ということになる。具体的には「仏のはたらきを喜び、音楽を奏し、天の華を降らせ、香を薫じて虚空を飛行する」存在である。

仏教的な意味に取る限り、その起源は当然ながらインドに求められる。仏教成立以前のインド神話の中には、ガンダルヴァやキンナラといった半人半獣あるいは半人半鳥の姿の神が登場しているが、これは仏教の中に音楽神として採り入れられる。その造形は、初期においては形姿が一定していない。羽を生やすものもあれば、半身を鳥とするものなどがある。紀元前2世紀頃からインドのバルハットやサンチー等の石像遺物中に典型的な例を見いだせるが、紀元前1世紀後半頃には天衣のような衣を翻して飛行する天人像が表されるようになっていく。このような天人像は仏教の弘布とともに西域に及び、やがては中国に伝えられることになる。

### 2. 敦煌の飛天芸術と舞踊

敦煌壁画に描かれた飛天は3期に分けられる。初期は北涼（397-439）から西魏（535-556）のもので257窟のU字型の身体を起点として285窟の軽やかで動的なかたちに至る。西域式の飛天に内陸本来の羽人、南朝の飛天の特色が集約され豊かな形象が作られて行った。

中期は北周（557-581）から唐（618-907）にかけてであり敦煌飛天がもっとも繁栄した時期である。姿勢の多様な変化、動きの軽やかさ、生き生きとした情趣、表情は豊かとなり、身体は豊満なかたちとなる。220窟、57窟、320窟、25窟にはこ

の時期を代表する彩色豊かで、華やかなイメージが描かれている。末期は五代（907-960）から元（1227-1368）にかけての時代である。舞いとぶ姿勢は様々に変化したが生き生きとした生命力を失っていく。

敦煌舞踊の研究者である高金栄は飛天のかたちを舞踊化するうえで以下の特徴を見い出している。

①手の形が豊かに変化し、きめが細かく、優美で中国古典の美しさに富む。

②胴体の形は変化にとび、腕と肘の部分が曲がっている。

③足は素足で足首は上方、側方に曲がるか伸びる。

④長い錦帯、鼓、琵琶を使用する。

以上を把握し、呼吸、眼の使い方、手振り、手や足の基本位置、ジャンプと回転などを工夫する必要がある。

### 3. 無重量環境における舞踊の実施

パラボリックフライトという航空機による無重力模擬の環境のなかで、2度にわたって搭乗した被験者が特徴的な動きと小道具の可能性の検討を行った。

#### 結果の考察

2回にわたる試行の結果、被験者は無重量と2G（2倍の重力）に慣れるのが難しかったが、2回目には少し慣れて次の結果を得た。

①空中では身体を前屈や後屈のUの字の姿勢をとりやすい。

②空中の移動は魚が水中を移動するような軌跡をたどる。

③絹の紗は風がないと動かないので工夫の余地がある。

④壁に近寄らないセンサーを備えた丸い花のオブジェは効果的であった。

以上から飛天を模した舞踊を通してひとつには古代の人々が夢想した天への憧れを実現できる可能性を示すとともに、地上とは違う無重量環境での効果的な動き方の特性を追及する糸口となった。

本研究は以下の人々との共同で行われた。

東洋琴学研究所 稗田浩雄  
文化庁 美術文化財調査官 林 温  
多摩美術大学 久保田晃弘  
上海音楽学院 陳 応時  
宇宙開発事業団 宇宙環境利用推進部 福田義也

#### 主要参考文献

- 石黒節子『舞踊の始原』東京：三一書房 1997。  
Xijiu, Dong *Dunhuang dancing*.  
Xin Jing arts publication, 1992, 1993.  
Xifan, Li *Chinese dance history*.  
Zhe Jang education, 2001.  
李 振甫『敦煌の手』アジア文化交流会 1993。